

(2) 異常気象の影響は

立秋も過ぎ、各地の夏祭りが華やかな賑わいを見せていますが、今夏もまた暑さに振り廻されました。7月31日に35℃以上の猛暑日となった観測地点は、全国927地点の内170地点に達し、一昨年7月の最多記録152地点を上回ったといえます。そうした中で、旬を迎えた夏果実を中心に順調な出回りをみせていますが、暑すぎる街中での消費の場では、ソバやソーメンなど冷たい料理に使われる大葉や小ネギなどの薬味用野菜と、水分が多く食べやすい西瓜の動きは良かったものの、大方は加熱調理を嫌っての家庭需要の減による低迷した流れに終始せざるをえません。

一方、新聞などメディアの報道では、アメリカ中西部の穀倉地帯を中心に記録的な猛暑と少雨によりトウモロコシと大豆の作況が極端に悪化すると予想されると言っていますし、小麦の主産地ロシアやウクライナの黒海沿岸部も高温と乾燥した気候に見舞われて、今年産小麦は前年比20%減の見通しと報じています。その結果、食品や飼料の値上がり心配され、諸物価の高騰にまで繋がる怖れを予想する向きもあります。確かに、食品メーカーなどからみれば、食材の多くが輸入頼みの状況がありますね。豆腐やしょう油、食用油を始め、卵やパン、めん類など食卓を賑わす食材全てを国産品で対応できない現実は厳しいものがみられます。

異常気象が話題に載るようになって久しいのですが、食と農をめぐる話題の中では穀物の不作や国際相場の高騰など、過去には見られなかった需給のミスマッチが大きな話題となりがちです。特に業務筋の企業にとっては存亡にも係わる面もあるだけに関心を寄せざるをえないでしょう。そして、作る側でも農産物の供給地図の変化が感じられるようになってきており、水稻や果樹栽培での栽培適地の北上や種苗会社による気候変化に対応できる品種開発などの話題も目立つようになってきています。品目によって収量の増減に影響することは当然でしょうし、同時に品質にも大きく作用してくることは間違いありません。

今後とも遠^おち近^こちの地球環境の変化には気を配る必要があるのではないのでしょうか。

【今回のポイント】

- ・記録を塗り変える暑い夏が続いている。
- ・国内ばかりでなく地球全体が狂ったような異常天候に振り廻されての話題が多く報じられている。
- ・食と農との関連の中で、地球温暖化の影響を考えなければならないのではない。